

宮沢賢治の受容における高村光太郎の位置に関する考察

松沢 寿重

はじめに

高村光太郎と宮沢賢治。詩集『道程』、そして『春と修羅』。口語自由詩が確立された大正詩壇に燦然たる足跡を残した詩人。日本の近代文学における彼らの位置や存在の大きさ、先進性、特異性は、すでに多くの先学によって繰り返し語られ、初等・中等教育の学習材に用いられる頻度も高い国民的なロングセラー作家である。学校教育下の啓蒙も手伝ってか、文学の領野で扱われる機会が比較的多い二人ではあるが、美術の領野へと目を転じて、その存在感、後世に与えた影響は、文学のそれに劣らずひとときわ大きいと言わなくてはならない。新潟市美術館の場合、高村光太郎は、ブロンズの彫刻作品《薄命児頭部》(図1)をもって1985(昭和60)年開館時以来の所蔵作家であり、オーギュスト・ロダンからの影響を一起点とする近代日本彫刻史の流れをたどる上においても、必ず欠かす事の出来ない彫刻家の一人である。一方の宮沢賢治は、金昌烈(キム・チャニョル)が描いた11点組の絵本原画《やまなし》(図2)や、高松次郎による4点組の版画連作《水仙月の四日》(図3)といった収蔵作品を通して、長らく市民の目に親しまれてきた。また、2008(平成20)年には新潟市新津美術館において『絵で読む宮沢賢治展』(註1)が開催され、賢治自身の手による水彩画や直筆原稿をはじめ、賢治文学の絵画化に取り組んだ50名の作家たちの作品が一堂に会したことも、まだ記憶に新しい。

草野心平が、高村光太郎と宮沢賢治を「巨人型と天才型」と評した例(註2)を挙げるまでもなく、この二人が文芸史上に各々屹立する存在である事は論を俟たないが、彼らがお互いの才能を認め合い深く尊敬し合う間柄であり、殊に37歳で早世した宮沢賢治の今日に至る評価に高村光太郎が大きく関与している事については、実は意外なほど一般的には知られていない。宮沢賢治の受容において高村光太郎の果たした役割を追いながら、可能な限り二人の関わりを詳らかにする、本稿はそのための一考察である。

光太郎と賢治との出会い

1952(昭和27)年7月、高村光太郎は花巻共立病院の院長で宮沢賢治の主治医だった佐藤隆房との対話の中で次のように述べている。「今は賢治さんより年が上で、私が先輩だと皆さんも考えていますが、五十年百年すぎると、私が賢治さんの後輩であるようにみなが思うことになりそうです。」(註3)賢治が没してから20年近く、賢治への評価の高まり、その確かな趨勢を実感していた光太郎の、当時の率直な思いではあったに相違ない。それから60年以上の歳月がさらに経過した今日、インターネットで「Miyazawa Kenji」と「Takamura Kotaro」を入力検索してみると、それぞれ568,000件、42,600件がヒットする(註4)。ウェブ検索の結果が必ずしも知名度や重要度の絶対的指標ではないが、サイバー空間に流布する情報の量に限って言えば、宮沢賢治が高村光太郎を大きく上回る。これは、数次にわたる全集の刊行に加えて、賢治が童話作家として広く認知され、絵本や演劇、アニメーション動画などを通じてより幅広い社会の層に浸透し、支持されるようになったためであろう。その広がりや、世界各国語への翻訳によって今や地球規模のスケールに及ぶ。先の光太郎の言葉は、あたかも今日の状況を予見していたかのようでもあり感慨深い、それでは一体、光太郎は、いつ、どのようにして賢治の存在を知ったのであろうか。

賢治が詩集(但し、賢治自身は「詩」ではなく「心象スケッチ」と呼んだ)『春と修羅』1千部を自費出版で上梓したのは、1924(大正13)年4月。発行所は東京市京橋区南鞘町の関根書店であった。定価2円40銭。本はほとんど売れず、販売を取り次いだ書店は、勝手にゾッキ本として流してしまったという。(註5)また、多くが作家や詩人等に献呈されたこととされ、『新・校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房刊)所収の年譜には、献呈先として北原白秋や佐藤惣之助と並んで高村光太郎の名前も挙げられている。(註6)光太郎に献本された時期は定かではないが、翌1925(大正14)年8月、草野心平が詩友の黄瀛(こうえい)に連れられて光太郎のアトリエを訪れ、草野から熱心に聞かされた事が、光太郎が賢治を意識する決定的な機会となった。「往年草野心平君の注意によって彼の詩集『春と修羅』一巻を読み、その詩魂の龐大で親密で源泉的で、まったく、わきめもふらぬ一宇宙的存在である事を知って驚いた。」(註7)という回想の記述がそれに符合する。

草野は、1924年秋に中国の広東で友人から送られてきた『春と修羅』を一読瞠目しており、翌年4月に黄瀛らとともに詩誌『銅鑼』を創刊、6月に帰国してまもなく、花巻在住の賢治へ宛てて同人勧誘の手紙を書き送っている。かくして、賢治は9月発行の第4号から『銅鑼』に



図1 高村光太郎《薄命児頭部》1905年
新潟市美術館蔵 撮影：宮原一夫

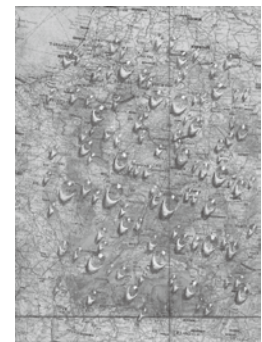


図2 金昌烈《「やまなし」より》1984年
新潟市美術館蔵

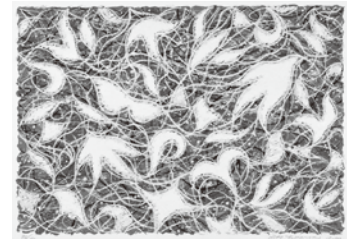


図3 高松次郎《「水仙月の四日」より》1984年
新潟市美術館蔵

註1 会期：2008年5月31日～6月22日
同展は、萬鉄五郎記念美術館、平塚市美術館、下関市立美術館、静岡アートギャラリー、天童市美術館でも巡回開催された。

註2 草野心平『わが光太郎』(1990年/講談社)
pp.151-152

註3 佐藤隆房『宮沢賢治』第6版(1985年/富山房)
p.352

註4 2014年1月23日現在の数字

註5 草野心平によれば、1925年当時、「神田の露店の古本屋で『春と修羅』は5銭で叩き売り同然の待遇を受けていた」という。
草野心平『わが賢治』(1970年/二玄社) p.161

註6 賢治の父、宮沢政次郎の言によると、『春と修羅』の献呈先から返事が来たのは、高村光太郎と草野心平からの2通のみであったという。
吉田コト『月夜の番音機』(2008年/筑摩書房) pp.16, 68

註7 1934年3月13日稿「宮澤賢治に就いて」『高村光太郎全集(増補版)』第8巻(1995年/筑摩書房) p.229

註8 このことについては、草野よりも先に光太郎を訪れ、彫刻のモデルもつとめた中野秀人、黄瀛との間で、賢治の事が既に取り沙汰されていた可能性も指摘されている。深澤忠孝「心平・賢治・光太郎—その接点と相互作用—」『宮沢賢治研究Annual 2号』（1992年／宮沢賢治学会イーハトーブセンター）pp.263-269

註9 書簡141〔1926年10月11日〕『高村光太郎全集（増補版）』第14巻（1995年／筑摩書房）p.70

註10 草野心平「わが光太郎」（1990年／講談社）p.149

註11 森三紗「高村光太郎と宮沢賢治と森庄巳池」『COAL SACK 第65号』（2009年／コールサック社）pp.128-137

註12 1931年秋頃の手紙
草野心平「わが賢治」（1970年／二玄社）p.149、
「わが光太郎」（1990年／講談社）p.148

註13 翻訳：高村光太郎「若き藝術家達に」より『ロダンの言葉』（2007年／講談社）p.283

註14 賢治の光太郎訪問に関して——居合わせた『銅鑼』同人の手塚武とともに語り合い、夕方上野の料理屋で一杯やりながら三人で鍋をつつきあった——という内容を記した文献が散見される。これは、『校本 宮沢賢治全集 第14巻』（1978年／筑摩書房）所収の年譜に反映された手塚武の証言に基づいているが、光太郎の語った内容とは大きく食い違う。『宮沢賢治追悼』（1934年）所収の手塚の手塚の寄稿文との細部に着目した入沢康夫の指摘もあり、『新・校本 宮沢賢治全集 第16巻』（2001年／筑摩書房）の年譜では校訂されているので、それより以前の、特に賢治の生誕100年（1996年）記念を前後して刊行された文献を参照する際には留意が必要である。

参加することとなり、これが、光太郎が賢治を知ったとされる時期（註8）と重なるのである。

『銅鑼』は、1928（昭和3）年6月発行の第16号をもって終刊するが、賢治の詩は第13号まで9冊にわたって13篇が掲載され、光太郎も『銅鑼』の活動を経済的に支援しつつ度々寄稿していた経緯から、この謄写版刷りの同人誌は、いわば光太郎と賢治の出会いの舞台ともいべきものとなった。

光太郎と賢治との間で直接書簡のやり取りがあった事は、いくつかの資料から推察されるが、東京市本郷区駒込林町の光太郎のアトリエが1945（昭和20）年4月13日の空襲で、そして花巻の賢治の生家も同年8月10日の空襲で罹災、全焼してしまった事もあり、二人の間で交わされた書簡は今日まで一通も伝存しない。間接的に伝わるものとして、光太郎が親友の水野葉舟に宛てた書簡に、「宮澤氏からの本先日女中さんに托しましたが…」という行で賢治の童話集『注文の多い料理店』（1925年12月刊）について触れたものが知られている。（註9）また、草野心平の回想には、光太郎のアトリエで智恵子も交え『春と修羅』を取り出して一緒に読みながら談笑した事が記されており、（註10）光太郎の手元に、賢治から贈られた『春と修羅』、『注文の多い料理店』の2冊が存在したことは、ほぼ確かなことと考えられる。

一方、賢治の父、宮沢政次郎が賢治研究家に語ったという話によると、賢治は光太郎の詩集『道程』を肌身離さず持って愛読していたという。（註11）『道程』は光太郎の自費出版で1914（大正3）年の初版は200部ほどであったが、再版されたのは賢治の没後ようやく1940（昭和15）年のことであるから、賢治が肌身離さず持っていたという本は、光太郎から贈られたものだった可能性も十分に考えられよう。

賢治の座右書、ということでもさらに考慮に入れたいのが、「高村光太郎氏にはまことに知遇を得たし。以て芸術に関する百千の疑問を解し得ば…」と書かれていたとされる賢治の手紙である。これは、草野心平が記憶の中に残る「賢治からもらった手紙」（註12）の一つとして紹介しているものだが、この、光太郎の知遇を以て「芸術に関する百千の疑問を解し」得た、とは具体的にどういう事であろうか。後述するが、光太郎と賢治が直接面会したのは生涯たった一度の、しかもほんの短い時間でしかない。字義通り「百千の疑問」を解するためには、「芸術に関する」相当量の情報の受け渡しがあったと考えるのが自然だが、短時間の面会でそれが為されたとは考えにくいし、書簡の往復だけでは（決して不可能ではないが…）あまりに手間がかかり過ぎよう。そこで、本の介在した可能性が浮上する。賢治と交流があったと考えられる時期、光太郎の著書には、評論『印象主義の思想と芸術』（1915年／天竺堂書房）、翻訳『ロダンの言葉』（1916年／阿蘭陀書房）、翻訳『続ロダンの言葉』（1920年／叢文閣）、翻訳『回想のゴッホ』（1921年／叢文閣）、評伝『ロダン』（1927年／アルス美術叢書）が、いわゆる「芸術に関する」既刊書として存在した。推論だが、これらの全てあるいはいずれかが、光太郎から賢治の元へ贈られていたとしたら、「百千の疑問」を解するに要した道のりも、さほど遠いものではなかったのではなかろうか。試みに、光太郎の翻訳したロダンの言葉が賢治に届いていたと仮定し、たとえば次の一文によって、賢治がどれほど心強く励まされ勇気づけられたか、想像してみるとよい。

「深く、恐ろしく真実を語る者であれ。自分の感ずるところを表現するに決してためらうな。たとえ公定思想と反対である事がわかった時でさえもです。恐らく最初君達は了解されまい。けれども一人ぼっちである事を恐れるな。友はやがて君達の処へ来る。なぜといえば一人の人に深く真実であるところのものは一切の人にもそうであるからです。」（註13）

以上、述べてきたように、賢治にとって光太郎は特別な敬慕の対象であった事は明らかだが、遠く岩手の空の下から募る想い黙し難く、賢治が光太郎のアトリエを訪ねたのは1926（大正15）年の12月であったという。夕刻の突然の訪問であったためか、光太郎はちょうど都合が悪く、その時は玄関先の立ち話程度で、後日の再訪を約して終わつたらしい。（註14）結局、これがただ一度きりの二人の面会となった。光太郎は後に、賢治の再訪を心待ちにしていたことを述べているが、賢治にとっては、崇敬して止まない光太郎の顔を一目見る事が出来、それだけでもうすっかり渴望が満たされた思いであったのかもしれない。

光太郎に出会った頃の賢治は、「農民芸術」の創造を標榜する羅須地人協会の活動の只中だったが、治安維持法を背景とする官憲の圧力や、自身の健康の問題もあって、挫折。1928

(昭和3)年8月から病臥、療養に就く身となる。一時回復をみて、東北砕石工場の技師として奔走するも、1931(昭和6)年9月に再び発病、重篤な状態に陥り、これが死に至る病となった。亡くなるひと月前、1933(昭和8)年8月19日に賢治を訪ねた母木光(儀府成一)は、その時の様子を「とりわけ高村光太郎のことを口にする時は如何にもなつかしそだった」と記している。(註15)

賢治の顕彰

1996(平成8)年に宮沢賢治学会イーハトーブセンターが発行した『初期の宮沢賢治に尽くした人々』という冊子では、賢治受容史の初期において功績の顕著な14人が紹介されている。小沢俊郎、恩田逸夫、菊池暁輝、草野心平、境忠一、佐藤隆房、佐藤寛、関徳彌、高村光太郎、谷川徹三、永瀬清子、藤原嘉藤治、松田甚次郎、横光利一。いずれも、生前ほとんど無名に近かった宮沢賢治をいち早く評価し、世界に広める活動の基礎を築いた先駆者たちだが、中でも高村光太郎の占める位置は特権的である。

賢治が没した1933年9月21日時点での、光太郎の年齢は50歳。多くの人々を惹きつける簡潔平明な言葉を操り出す力、文章表現力はもちろんだが、社会的な影響力、生前の賢治との関係、遺族からの信頼といった総合的な実力によって、光太郎の存在感は抜きん出ている。光太郎と並ぶ功一等の草野心平は30歳で、少壮気鋭ではあったが、当時はまだ文芸家としての大成には道半ばの観が否めない。無名の宮沢賢治を歴史的評価の大舞台へと押し上げるためには、高村光太郎という強力な推進剤が必要だったのである。

9月22日、賢治の訃報を電報(註16)で受け取った光太郎は、草野に告げ、花巻行きの旅費を工面して初七日の弔問を配慮。さらに、9月29日、賢治の弟・宮沢清六に宛て、弔意をしたためた手紙を書き送っている。(註17)こうした賢治没後の初動は、何よりも第一義に遺稿の保存状態を案じてのことであった。ちなみに、この頃の光太郎といえば、妻の智恵子が精神を病み、その看病に追われていた時期である。他人の世話を焼く余裕などはほとんど無かったはずだが、智恵子が亡くなる1938(昭和13)年10月までの数年間にあっても、光太郎は賢治を顕彰する様々な動きに可能な限り関わり続けた。以下に、特に重要と思われる項目を挙げてみる。

①『宮澤賢治追悼』への寄稿

『宮澤賢治追悼』は賢治の没後4ヶ月で編纂発行された追悼文集。B5判紙装、83頁、発行1934(昭和9)年1月28日、発行人は草野心平。賢治の略歴、遺稿(「龍と詩人」と合わせて、生前の賢治と関わりのあった32人(註18)が寄稿している。光太郎は、末文で「今或る身邊の事情のためは以上書いてある時間がない」としながらも、「コスモスの所持者宮澤賢治」と題する追悼文(1933年11月12日付)を寄稿した。420字ほどの短い文章だが、光太郎は、南フランスのエクズ=アン=プロヴァンスに隠棲した画家セザンヌを引き合いに、「片田舎の一老翁の仕事が、世界の新しい藝術に一つの重大な指針を與へるほど進んでゐた」ことを述べ、さらに「内にコスモスを持つ者は世界の何處の邊遠に居ても常に一地方的の存在から脱する」として「岩手縣花巻の詩人宮澤賢治は稀に見る此のコスモスの所持者であつた」と書いた。この『宮澤賢治追悼』を読んで感銘を受けた横光利一が、書物展望社の編集者に全集の出版をもちかけ、光太郎に会うように指示したことが、曲折を経て1次全集(1934-35年 文園堂版全3巻/装幀:高村光太郎)の実現に結び付く契機となる。

②『雨ニモマケズ詩碑』への揮毫

『雨ニモマケズ詩碑』(図4)は、1936(昭和11)年11月21日、花巻川口町桜の羅須地人協会跡地に、賢治の三回忌に合わせて建立された。高さ約3.3m、幅約1.4m、厚さ約30~45cm、重さ約5.6tの石巻産稲井石が使われている。詩碑建設委員長は花巻共立病院院長の佐藤隆房。碑文の「雨ニモマケズ」は、賢治が1931年11月3日に病床で手帳に書き記したと考えられているもので、その存在が知られたのは1934年2月16日、東京新宿のモナミで開かれた賢治の追悼会の席上であった。この時、手帳は宮沢清六が花巻から持参した賢治のトランクの内ポケットから発見され、その場に立ち会った光太郎の様子を含む一部始終を永瀬清子が証言している。(註19)詩碑への採用は賢治の父・政次郎の提案によるものだったが、長文のため、後半部分の「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ…」以下を用いることとし、光太郎が碑文の揮毫を引き受けた。コンクリートの基礎の中には、賢治の遺骨、経文(法華經)、文園堂版全集3巻、詩碑

註15 儀府成一『人間宮沢賢治』(1971年/蒼海出版)
※『新・校本 宮沢賢治全集 第16巻』(2001年/筑摩書房)の年譜p.509で引用

註16 藤本光孝の「回想」によると、「電報で二、三の人に知らせてはどうかといふ話」に、宮沢清六は先方に迷惑がかかることを遠慮して辞退し、関徳彌と森荘巳池もそれに同意したが、藤本が強く主張して発信されることとなったらしい。電報は草野心平にも届いていた。
藤本光孝「回想」『宮澤賢治研究』(1939年/十字屋書店) pp.355-363
草野心平「わが賢治」(1970年/二玄社) pp.210-211

註17 書簡2524〔1933年9月29日〕『高村光太郎全集(増補版)』第21巻(1996年/筑摩書房) pp.221-222
この手紙は、1933年10月6日の『岩手日報』学芸欄「宮沢賢治氏追悼號」に掲載された。

註18 この32人の寄稿者には、後に全国美術館会議会会長を務め日本のミュージアロジーの牽引者として重きをなした土方定一も名を連ねている。土方は「銅鑼」同人としての関わりからの回想を寄せた。



図4 雨ニモマケズ詩碑

除幕式の様子を記録した動画が存在し、詩碑近くの枚地人館で見ることが出来る。

註19 小倉豊文「『雨ニモマケズ手帳』新考」(1978年/東京創元社) pp.305-307
永瀬清子「『雨ニモマケズ手帳』の発見—モナミの会の思い出—」『宮沢賢治童話集 月報14』(1993年/くもん出版)

註20 1941年8月に龍星閣から出版された光太郎の第2詩集。1911年から30年間にわたる智恵子に関する詩29篇、短歌6首、散文3篇からなる。

註21 賢治が最愛の妹トシとの死別を書いた連作「無聲慟哭」の一篇で、『春と修羅』に収められている。

註22 『高村光太郎全集（増補版）』第8巻（1995年／筑摩書房）pp.231-239

註23 註21に同じ

註24 1946年の作とされる光太郎の短歌。
『高村光太郎全集（増補版）』第11巻（1995年／筑摩書房）p.97

註25 林風舎の宮沢和樹氏の談による。

註26 『新潮』1956年4・5月に掲載。
『作家の自伝9 高村光太郎』（1994年／日本図書センター）pp.203-217



図5 旧太田村山口の高村山荘
光太郎の小屋は二重の套屋で保護されている。



図6 高村山荘の内部

建立の由来等を収めた鉛の箱が安置されている。1945（昭和20）年5月、光太郎は宮沢家や佐藤隆房の熱心な招きにより花巻へ疎開するが、それはこの詩碑による所縁が大きい。なお、碑文には脱字・誤字が4ヶ所あり、1946（昭和21）年11月に光太郎の直筆で訂正の書き入れ、追刻が行われた。

以上を含め、賢治の没後数年間に急展開した顕彰、再評価の動きとそれに関わる光太郎の事蹟は、別掲の「高村光太郎と宮沢賢治の関係年譜」（p.8）に記した通りである。繰り返しとなるが、光太郎にとってそれらは、智恵子を看取るまでのあらゆる私的な出来事と同時並行で経過した、ということに深く留意するべきであろう。『智恵子抄』（註20）の詩篇「レモン哀歌」が、『春と修羅』の「永訣の朝」（註21）に影響を受けて書かれたとする解釈は、よく言われるところではある。傑出した詩人たちが最愛の女性の臨終に捧げた言葉について、安易な比較をするのは慎むべきかもしれないが、光太郎が賢治の詩によって絶望的な孤独から救われる、そうした夜は確かにあったのではなかろうか。

光太郎の当時の心境を推し量る手掛かりとして、智恵子を亡くす7ヶ月前、1938年3月『婦人之友』誌のために書いた「宮沢賢治の詩」（註22）を挙げておきたい。この文章で光太郎は「永訣の朝」と「松の針」（註23）を全文紹介し、「詩の世界に於ては慟哭さへも斯の如く清浄の氣に満たされるのである。陰惨が書いてあってしかも其を貫き破る光がある」と評している。慟哭を満たす清浄の氣、そして陰惨を貫き破る光。それは紛れもなく「レモン哀歌」に共通し注がれた精神に他ならない。

光太郎の花巻疎開と山居七年

「みちのくの花巻町に人ありき賢治を生みきわれを招きき」（註24）

光太郎は、1945（昭和20）年4月13日の空襲で東京のアトリエが灰燼に帰し、5月、宮沢家や佐藤隆房の招きに応じて花巻へ疎開することとなった。光太郎にとって宿命的ともいえる「みちのく」とは、何よりもまず智恵子のふるさと二本松のことであり、詩想の源となった安達太良山と阿武隈川の眺望であったが、賢治との深い因縁から更なる「みちの奥」へと誘われ、新たにイーハトーブの野山や森がここに加わったわけである。

この花巻疎開に関連して、宮沢家では、光太郎が賢治の貴重な原稿を守ってくれた恩人として語り継がれているという。（註25）つまり、花巻は8月10日、米軍の艦載機による空襲にみまわれ、光太郎が身を寄せていた宮沢家も罹災、全焼するが、予め空襲に備えて防空壕を設け賢治の原稿を守るべきであることを光太郎が進言、罹災時には宮沢清六の必死の奮闘もあり、果たして原稿は焼失の難を免れたのであった。これによって、後に校本全集が刊行される道が保たれ、賢治研究の飛躍的な発展に寄与したことを考えると、その意味はきわめて重大であったといえよう。東京の空襲でほとんど為す術もなく焼け出された光太郎が、「焼失作品おぼえ書き」（註26）を記さねばならなかった事実を思えば、それは尚更の事である。

宮沢家の罹災を機に、同年10月、光太郎は花巻の西の郊外、太田村山口部落に鉱山小屋を移築して移り住み、ここで農耕自炊、いわゆる「自己流謫」の七年間を過ごす。（図5・6）冬は零下20℃、積雪が1mを超える酷寒の地で、「日本最高文化の部落、昭和の鷹ヶ峯」を建設することを夢見ながら、『暗愚小伝』『典型』などの詩作を行ったが、七年間ついに彫刻の本格的な制作には至らなかった。賢治に関しては、日本読書購買利用組合の刊行する『組合版宮沢賢治文庫』の編纂に宮沢清六とともに携わった他、年回忌の行事に講演や寄稿を行った事が主な足跡である。また、「花巻賢治子供の会」が毎年上演する賢治の童話劇には目を細めていた様子が書簡や日記の記述から窺える。未来を担う子供たちとの交流こそ、光太郎には最も愉悦のひとつであったかもしれない。

光太郎の最後の花巻訪問、そして最後の装幀作品

光太郎は、1952（昭和27）年6月、青森県から十和田国立公園功労者顕彰記念碑の制作委嘱を受け、裸婦像の制作を決意。10月、太田村の小屋を出て帰京し、中野の故中西利雄アトリエで制作にとりかかった。裸婦像の制作は順調に進み、翌1953（昭和28）年秋に完成設置、10月21日に除幕式を迎える。光太郎の「みちのく」は畢生の作《乙女の像》をもってさらに北上し、十和田湖畔の象徴的存在として未永くその姿形を地上にとどめることとなった。

光太郎は、除幕式からの帰途には花巻へ寄らず、あらためて11月25日、草野心平、難波田

龍起とともに花巻を訪れた（滞在は12月5日まで）。この頃の光太郎と宮沢家との交流を示す格好の資料として、図8の写真がよく使われるが、これについては、撮影が「昭和28年」とされているものと「昭和29年」とされているものと、実は二通りが存在するので、ここで整理を行ってみたい。

まず、「昭和29年」の方であるが、1956（昭和31）年5月に発行された『宮澤賢治全集月報2』（筑摩書房）の5ページ目に「昭和29年春 宮澤家で」という記載があり、かなり早い時点から「昭和29年」として扱われてきたようである。そうした経緯もあってか、現在、花巻の宮澤賢治記念館においても「昭和29年」の表記で写真の紹介が為されている。一方、財団法人高村記念会（花巻市）の会長を務めた佐藤隆房の著書『宮澤賢治』（富山房）では、これが「昭和28年晩秋」として挿図されている。先述のとおり佐藤隆房は宮沢家と非常に関係が深い人物であり、図8の写真の中にも光太郎と並んで写っている当事者なので、情報には相応の確度があると考えられる。では、「昭和28年晩秋」と「昭和29年春」の、いずれが真相だろうか。

幸いにして、『高村光太郎全集 第13巻』（筑摩書房）には1950（昭和25）年12月31日から1956（昭和31）年3月30日までの光太郎の日記が収められている。この中の、1953（昭和28）年12月3日（木）の記述には、「院長さんの車迎にくる、宮澤家行、老人はじめ一同にあふ」とあり、これが佐藤隆房の著書の記載とほぼ一致する。日記では、この日付よりも後に光太郎が宮沢家を訪れた記述はいっさい無く、光太郎が亡くなる5日前まで迎える動勢によっても、これが最後の花巻訪問であった事を勘案すると、図8の写真が撮影された日付は、〈1953（昭和28）年12月3日〉と考定されるべきであろう。

光太郎は1954年5月から急速に体調が悪化し、病の床に伏すようになる。以前から病んでいた肺結核の病勢が昂進したためであった。折しも、『宮澤賢治全集』全11巻（筑摩書房）刊行の企画が新たに進められていたが、光太郎は病の身を推して内容見本のための推薦文を書き、全集の装幀と題字の揮毫を行った。そして、これが光太郎の最後の装幀作品となった。（図9）全集の第一回配本は1956（昭和31）年の4月であったが、この時に付された月報の編集後記には、次のように記されている。

「本全集の装幀については、高村光太郎先生にお願いして宮澤賢治全集にふさわしい立派なものをつくって頂きましたが、先生の御病勢にわかに革まって、去る4月2日に全集発行を見ずして逝去されたことは実に残念なことであります。謹んで先生の御冥福をお祈りし上げる次第です。」

結語にかえて——画家・宇佐美圭司の振り返り

新潟市美術館の所蔵品に、宇佐美圭司の《霧の街に沈む》という作品（図10）がある。これは、宇佐美が「ゴースト・プラン」と呼ぶ、4つの人型を重ね合わせた図像をパターンで展開させる手法で描いた1点である。冒頭で紹介した金昌烈や高松次郎のように、賢治文学の絵画化に取り組んだ成果としての作品ではないが、宇佐美は、この「ゴースト・プラン」を『春と修羅』の序詩に登場する「透明な幽霊の複合体」と対応させ、絵を見るように（あるいは描くように）しながら賢治の詩（心象スケッチ）の構造分析を試みた論稿を世に問うた。『心象芸術論』（1993年／新曜社）に収められた「心象スケッチ論 宮澤賢治『春と修羅』序 私註」がそれで、宇佐美はこの現代絵画手法による賢治詩解読のアプローチによって、1994年、第4回宮澤賢治賞奨励賞を受賞している。宇佐美は、20世紀の抽象絵画の出現以降、すでにあらゆる事がやり尽くされた観のある現代絵画の閉塞状況、危機感を強く意識し発言を続けた画家だったが、自らの画業の拠って立つ位置を探る上で、宮澤賢治を振り返り、その創造の重要性を再発見したのであった。

新潟市美術館が開館してまだまもない頃、現在の3分の1ほどの広さしかなかった小さな常設展示室の中で、高村光太郎の《薄命児頭部》と宇佐美圭司の《霧の街に沈む》と一緒に展示されていた風景を、私は今あらためて思い返す。そして、私たちに手渡されたものの意味と大きさを考えながら、「敢えて此の無名に近い一詩人について私が語るのは、過去よりも未来に多く貫りを持ちたいといふ私の心に外ならない」と光太郎が世に語りかけた1938年の言葉（註27）とともにありたいと思う。

（新潟市美術館 学芸係長）



図7 十和田湖畔の《乙女の像》
Wikipediaより



図8 宮沢家の人々と高村光太郎
1953年12月3日の撮影と考定。
左より賢治の父政次郎、佐藤昌、光太郎、弟清六、佐藤隆房、妹クニ、清六夫人愛子、母イチ、妹岩田シゲ

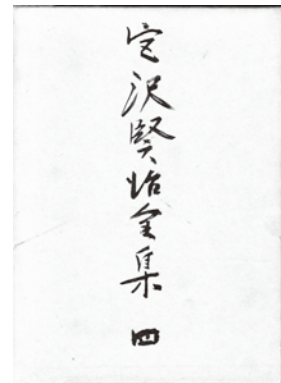


図9 光太郎最後の装幀作品『宮澤賢治全集』

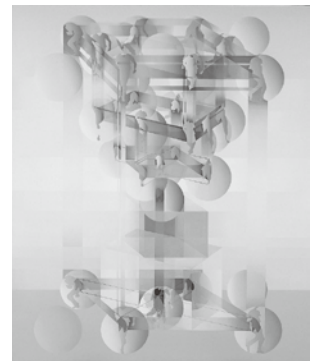


図10 宇佐美圭司《霧の街に沈む》1984年
新潟市美術館蔵

註27 同註22に同じ
『宮澤賢治の詩』『婦人之友』1938年3月

高村光太郎と宮沢賢治の関係年譜（松沢寿重 編）

※本年譜の作成にあたり、『高村光太郎全集（増補版）』（筑摩書房刊）所収の光太郎の日記、書簡、年譜、および『新・校本 宮澤賢治全集』【第16巻下／補遺・資料 年譜編】（筑摩書房刊）所収の賢治の年譜を底本とし、さらに掲掲の文献資料を参照した。また、林風舎（岩手県花巻市）の宮沢和樹氏からも貴重な教示を賜った。

1883年(明治16)	3月13日	高村光太郎、東京市下谷区西町(現東京都台東区東上野)に生まれる。	1939年(昭和14)	10月	光太郎、『新女苑』第3巻第10号への寄稿「詩の勉強」の中で、「殊に宮澤賢治の如き稀有の詩人を知った事は甚大の喜であつた。」と記述。
1896年(明治29)	8月27日	宮沢賢治、岩手県碑谷郡里川口村(現花巻市里川口町)に生まれる。		11月	光太郎、賢治研究紙「イーハトーヴォ」(宮澤賢治の会/盛岡)の題字を揮毫。
1914年(大正3)	10月	光太郎、詩集「道程」を自費出版(10月25日付)。12月に智恵子と結婚。	1941年(昭和16)	8月	光太郎、詩集「智恵子抄」を龍星閣から刊行(8月20日付)。
1924年(大正13)	4月	賢治、詩集(心象スケッチ)「春と修羅」を自費出版(4月20日付)。本はほとんど売れず、北原白秋、佐藤惣之助、光太郎その他詩人や知人に多く献本された。	1942年(昭和17)	9月	光太郎、佐藤隆房著「宮澤賢治」(9月8日付/富士房刊)の題字を揮毫。
	秋頃	中国広東にて嶺南大学在学中の草野心平、「春と修羅」を読み廻す。	1945年(昭和20)	4月13日	空襲で光太郎のアトリエが全焼。
	12月	賢治の童話集「注文の多い料理店」が出版(12月1日付)される。		5月16日	光太郎、宮沢清六の招きにより花巻へ疎開し、宮沢家に寄寓する。花巻に着いた翌日から光太郎は高熱を発し、肺炎と診断されて6月15日まで床につく。賢治の主治医だった佐藤隆房の手厚い医療を受ける。「みちのくの花巻町に人ありき 賢治をうみき われをまねきき」(光太郎)
1925年(大正14)	4月	草野心平、黄瀛(こうえい)らとともに詩誌「銅鑼」を創刊。		8月10日	空襲で宮沢家が全焼。光太郎の進言もあり、宮沢家では空襲に備え防空壕を用意していたが、これによって、賢治の貴重な原稿が焼失を免れる。罹災後、光太郎は佐藤昌方に移り、9月10日、佐藤隆房方に寄寓する。終戦日の8月15日には、太田村山口分教場の佐藤勝治の勧めで、太田村への移住を決意。
	7月	草野心平、賢治に「銅鑼」第3号を送り同人に勧誘。これに対し賢治は、「わたくしは詩人としては自信がありませんが一個のサイエンティストとしては認めていただきたいと思います」と応えて参加を承諾。		10月17日	光太郎、花巻近郊の太田村に鉱山小屋を移築して移る。7年間の農耕自炊の生活が始まる。この地で「昭和の鷹ヶ峰」建設を標榜。その間、賢治の遺族や関係者と親しく交流する。
	8月	草野心平、黄瀛に連れられて光太郎を訪問。光太郎、草野や黄瀛との交流を通して宮沢賢治を知る。「往年草野心平君の注意によって彼の詩集「春と修羅」一巻を読み、その詩魂の底大で親密で源泉的で、まったく、わきめもふらぬ一宇宙的存在である事を知って驚いた」と回想。	1946年(昭和21)	1月	佐藤勝治が発行した「ポラーノの広場」第2号(1月21日付)に、光太郎の「宮沢さんの印象」が談話筆記として掲載される。
	9月	賢治、「銅鑼」に第4号から参加。以後、1928年の第13号まで9冊にわたって13篇の賢治の詩が掲載される。また、光太郎も「銅鑼」の活動を支援しつつ度々寄稿する。		5月	光太郎、「農民芸術」第1輯に「第四次元の願望」(賢治の「第四次元の芸術」にまつわる論考)を寄稿。
1926年(大正15-昭和元)	4月	賢治、花巻農学校を辞し、花巻町下根椋の宮沢家別荘で農耕自炊の独居生活を始める。8月、同地にて羅漢地人協会を設立。		11月3日	光太郎、羅漢地人協会跡の賢治詩碑の脱漏4ヶ所に加筆訂正し、石工により追刻される。
	10月11日	光太郎、水野葉舟宛の書簡で、童話集「注文の多い料理店」について記述。		12月	光太郎、12月25日に第1回配本が刊行された日本読書購買利用組合刊「組合版宮沢賢治文庫」を宮沢清六と共に編集。各巻の編集覚え書きと装幀、装画、題字も担当。(この文庫は全11巻の予定だったが、1949年12月の第6回配本で中絶。)
	12月3日	賢治、上京。20日間の在京中に光太郎を訪問。		9月21日	講談社刊「宮沢賢治童話集」(全3巻/装幀:寺田政明)の編集にあたり、光太郎は宮沢清六とともに、各巻の作品構成や書名の決定などに協力。盛岡放送局のラジオ番組で光太郎の「宮澤賢治十六回忌に因みて」が放送される。(当日の朝、光太郎は放送を聴くために山口小学校で待機していたが、ラジオの電波状態が悪く、結局聴くことはできなかった。)
1928年(昭和3)	8月	賢治、両側肺浸潤(肺結核)の診断を受け病臥。実家に戻り療養。		9月21日	賢治祭に因み盛岡劇場で講演。同日付の「花巻新報」に「宮澤賢治十七回忌」を寄稿。
1930年(昭和5)	春頃	賢治、徐々に健康を回復。4月、東北砕石工場の鈴木東蔵が来訪し、合成肥料調整の相談を受ける。		1月	光太郎、花巻農学校に設置する賢治詩碑について相談を受ける。3月19日、同詩碑の除幕式に出席、記念講演を行う。
1931年(昭和6)	1月	賢治、東北砕石工場の技師となる。		10月	光太郎、詩集「典型」を中央論社から刊行(10月25日付)。
	8月9日~	光太郎、時事新報社の依頼により三陸地方の海岸を取材旅行。賢治は、帰途の来花を心待ちにしていたが、光太郎は、妻智恵子の病変により急速帰京したために、叶わず。	1951年(昭和26)	5月6日	宮沢政次郎夫妻(賢治の両親)、佐藤隆房とともに太田村の光太郎を訪問。
	9月10日	賢治、上京中に発熱。花巻の自宅に帰り着くとそのまま病臥。	1952年(昭和27)	3月21日	光太郎、青森県より十和田湖国立公園功労者顕彰記念碑のために彫刻制作を委嘱される。
	10月	この頃、光太郎、賢治へあて草野心平と寄せ書きを送る。賢治は病臥中にこれを受け取り、たいそう喜ぶ。また、賢治は草野あての書簡で、「高村光太郎氏にはまことに知遇を得たし、以て芸術に関する百千の疑問を解し得ば…」と記述。		6月15日~22日	光太郎、十和田湖へ視察旅行。
	11月3日	賢治、病床で「雨ニモマケズ」を手帳に記す。		10月12日	光太郎、十和田湖の作品制作のため花巻を立ち、帰京。翌日、東京中野の故・中西利雄のアトリエに落ち着く。
1933年(昭和8)	9月21日	賢治没。享年37歳。翌日電報で訃報を受け取った光太郎は、草野に告げて弔問のための旅費を用立てる。27日、草野は初七日に宮沢家を訪問。		9月21日	光太郎、賢治没後20周年記念祭にメッセージ「一言」を送る。
	10月6日	「岩手日報」芸芸欄「宮澤賢治氏追悼號」に光太郎の追悼書簡(9月29日付/宮沢清六宛)が掲載される。		10月21日	十和田湖国立公園功労者顕彰記念碑、序幕される。光太郎はその際の帰途には花巻へ寄らず、あらかじめ11月25日~12月5日、花巻を訪問。草野心平と難波田龍起が同行。賢治の遺族や関係者と旧交を温める。
	1月28日	草野の発行人名義で「宮澤賢治追悼」が出版される。光太郎も追悼文「コスモスの所持者宮澤賢治」を寄稿。この「宮澤賢治追悼」が横光利一の目に止まり、全集刊行の気運の端緒となる。	1954年(昭和29)	5月	光太郎、この頃から病臥、療養に就く。
	2月16日	東京新宿「モナミ」で賢治の追悼会(第1回宮沢賢治友の会)が催される。宮沢清六が持参した賢治のトランクの内ポケットから「雨ニモマケズ」が書かれた手帳が発見される。この会に光太郎も同席。	1955年(昭和30)	9月	光太郎、筑摩書房刊「宮澤賢治全集」(全11巻)の発刊にあたり、内容見本のための推薦文を寄稿。全集の装幀と題字の揮毫を行う。11月4日装幀作業を終え、これが生前最後の装幀作品となる。(全集の巻数をあらかず漢数字七~十一の文字は、光太郎の没後、その書体にあわせて草野心平が補った。)
1934年(昭和9)	3月頃	光太郎、書物展望社から「宮澤賢治全集」刊行についての相談を受け、草野心平を紹介して準備の進捗が、刊行は実現せず。		4月2日	光太郎没。享年74歳。5月25日発行の「筑摩書房「宮澤賢治全集」月報2」に光太郎の「宮澤賢治十六回忌に因みて」(1948年盛岡放送局のために起稿)が遺稿として紹介される。
	10月	文圃堂から「宮澤賢治全集」(全3巻)が出版される。光太郎は、その内容見本に編集者を代表して全集刊行の挨拶文「宮澤賢治全集刊行に際して」を書き、装幀、装画、題字も担当した。			
1936年(昭和11)	11月21日	賢治の三回忌に合わせ、花巻の羅漢地人協会跡に賢治の詩碑「雨ニモマケズ」が設置、序幕される。詩文は光太郎が揮毫。			
1938年(昭和13)	3月	光太郎、「婦人之友」3月号誌上で、賢治の詩「永訣の朝」「松の針」「雨ニモマケズ」を絶賛し紹介する。			
	10月5日	光太郎の妻智恵子没。享年53歳。			
1939年(昭和14)	6月	十字屋から「宮澤賢治全集」(全7巻/1944年2月配本完了)が出版される。光太郎は編集委員を務め、装幀、装画を担当した。			

参考文献

- 『高村光太郎全集』増補版（全21巻+別巻）筑摩書房、1994～98年
『新・校本 宮澤賢治全集』（全16巻+別巻）筑摩書房、1995～2009年
- 『宮澤賢治追悼』編集・発行：草野心平、1934年
『宮澤賢治研究』編集：草野心平、十字屋書店、1939年
佐藤隆房『宮澤賢治』富山房、1942年（第6版 1985年）
佐藤勝治『山荘の高村光太郎』現代社、1956年
『宮澤賢治全集 月報1～11』筑摩書房、1956～57年
伊藤信吉『高村光太郎 その詩と生涯』新潮社、1958年
佐藤隆房『高村光太郎山居七年』財団法人高村記念会、1962年
草野心平『わが光太郎』二玄社、1969年（文庫版 講談社 1990年）
草野心平『わが賢治』二玄社、1970年
『近代の美術 第7号 高村光太郎』至文堂、1971年
『日本文学研究資料叢書 高村光太郎・宮澤賢治』有精堂、1973年
『新潮日本文学アルバム8 高村光太郎』新潮社、1984年
宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房、1987年
『おもひで光太郎記念集』財団法人高村記念会、1987年
『年表作家読本 宮澤賢治』河出書房新社、1989年
『「高村光太郎・智恵子—その造型世界」展図録』呉市立美術館／三重県立美術館／茨城県立近代美術館／美術館連絡協議会／読売新聞社、1990年
深澤忠孝「心平・賢治・光太郎—その接点と相互作用—」『宮澤賢治研究Annual 2号』宮澤賢治学会イーハトーブセンター、1992年
永瀬清子「『雨ニモマケズ手帳』の発見—モナミの会の思い出—」『宮澤賢治童話集 月報14』くもん出版、1993年
『作家の自伝9 高村光太郎』日本図書センター、1994年
浅沼政規『山口と高村光太郎先生』財団法人高村記念会、1995年
佐藤進『賢治の花園—花巻共立病院をめぐる光太郎・隆房—』地方公論社、1995年
『生誕百年記念「宮澤賢治の世界」展図録』朝日新聞社、1995年
『初期の宮澤賢治に尽くした人々』宮澤賢治学会イーハトーブセンター、1996年
浅沼政規『宮澤賢治と高村光太郎との関係』財団法人高村記念会、1997年
『宮澤賢治生誕百年記念特別企画展図録 拡がりゆく賢治宇宙—19世紀から21世紀へ』宮澤賢治学会イーハトーブセンター、1997年
入沢康夫『賢治の光太郎訪問』『賢治研究 第80号』宮澤賢治研究会、1999年
『宮澤賢治—賢治と心平—図録』いわき市立草野心平記念文学館、1999年
佐藤進『雨ニモマケズ詩碑の由来』私家版、2000年
『詩稿「暗愚小伝」高村光太郎』二玄社、2006年
『修羅はよみがえった』財団法人宮澤賢治記念会、2007年
『絵で読む宮澤賢治展—賢治と絵本原画の世界』萬鉄五郎記念美術館／平塚市美術館／下関市立美術館／東京新聞、2007年
吉田コト『月夜の蓄音機』荒蝦夷、2008年
森三紗『高村光太郎と宮澤賢治と森狂己池—2008年7月19日 宮澤賢治の会講演改稿—』『COAL SACK 第65号』コールサック社、2009年
北条常久『詩友 国境を越えて—草野心平と光太郎・賢治・黄瀛』風濤社、2009年
矢野千載『高村光太郎書「雨ニモマケズ」詩碑について』『日本文学会誌 第23号』盛岡大学日本文学会、2011年
- 『宮澤賢治没後50年シリーズ 2《水仙月の四日》』英訳：CWニコル・谷川雁、絵：高松次郎、十代の会・物語テープ出版、1983年
『宮澤賢治没後50年シリーズ 3《やまなし》』英訳：CWニコル・谷川雁、絵：金昌烈、十代の会・物語テープ出版、1984年
- 対談：宇佐美圭司・荒川修作「すべてがわたくしの中にあるみんなであるように」『アクリラートVol.8』ホルベイン工業、1988年
宇佐美圭司「心象スケッチ論 宮澤賢治『春と修羅』序 私註」『心象芸術論』新曜社、1993年
鼎談：大岡信・武満徹・宇佐美圭司「抽象表現のあとに来るもの」『心象芸術論・栞』新曜社、1993年
対談：宇佐美圭司・村上陽一郎「賢治、デュシャン、ヴィトゲンシュタイン その世界同時性の意味するもの」『季刊アートプレスNo.4』新書館、1994年
宇佐美圭司「仮定された一つの青い照明」『宮澤賢治学会イーハトーブセンター会報 第10号・稿』宮澤賢治学会イーハトーブセンター、1995年

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第2号 (平成25年度)
Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.2

発行日 / 2014年3月25日

編集・発行 / 新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

印刷 / 三条印刷株式会社

ISSN 2187-6770